

体験版

男の娘（こ）だつてしちやうモン♪

夏目 なつめ

棗 なつめ

□□注意事項□□

普通にこのPDFファイルを開くとウインドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思えます。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大(125%くらい推奨)して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 歩(あゆむ) || ヒロイン(?) ……実は男の娘(こ)。小柄でセミロングの栗色の髪をツインテールに。パッドで詐欺っている胸をかなり気にしている(笑)。



● 先輩 || 中肉中背。顔はまあまあハンサム系。成績は中の中、スポーツはあまり得意でない、それなりの男子。

——はぶ……う……ちゅぶつ、ちゅぱつ、くちゅつ……はふ……ちゅぶつ、くぶぶつ、ちゅぶつ……ぢゆるる、ちゅぶぶ、じゆるんつ……んん、んう……ずちゅうつ、じゅりゆるつ……ちゅぼつ……あふ、はふう……ちゅぼんつ♪

歩(あゆむ)は雄々しく反り返った《逸物》を一旦口腔から吐き戻して先輩の寝顔を覗き見た。

「……先輩、起きないなあ……(れろ、えろつ)……せつかくう、歩が起こしにい……(れる、れろう)……来てあげたのに……」

どうやら、《逸物》の裏筋を舐めあげながら呟く歩の声も、爆睡中の先輩の耳には届いていないようだった。

気持ち良さそうに寝息を立てる先輩を、歩は些か不満気に見遣った。その寝顔の満足そうな表情は、決して歩の唇がもたらす刺激によるものではなかったからだ。

閉じられたカーテンの隙間から朝日が洩れているとはいえ、まだ七時前である。先程確認した目覚まし時計のタイマーが起動するまでには、まだ三〇分あまりあるようだった。つまり、こんな早くに起きる(いや、起こされる)事など想定外に違いない。

「…歩ね…昨日、先輩から告られてえ…（ちゅぷ、ちゅろつ）…嬉しかったんだよ…（ちゅぽつ、くちゅ、くぷつ）…だからあ、今朝、思い切って…（ちゅろ、ちゅ、ちゅぽつ）…起こしにい、来ちやったあ…あはっ♪」

勿論、自分がわざわざ起こしに来たのだから、無粋なタイマーはしつかり止めた。

「…（れる、るろう、えろつ）…らってさ、彼氏彼女になったんだモン…（ちゅぽ、ちゅ、ちるつ）…朝、起こしに来るのって、”お約束”よね？」

歩は唾液で、ぬろ、ぬろ、になった《逸物》に視線を戻して思わず頬を染めた。

勿論、《こつち》を起こしに来た訳ではない。

朝の六時に飛び起きた歩は気合を入れて薄化粧を施し、勇んで先輩の自宅へとやって来たのだった。

けれど、玄関のチャイムに伸ばした手指を止めて、歩はパッドで膨らめた胸元を不安そうに押さえた。

（大丈夫…：うん、大丈夫よ、歩っ！）

そして、昨夜の内に、二センチ程裾あげし直したセーラー服のスカートを少し恥ずかしそうに引っ張った。歩のその短いスカートの中には、他人（ひと）には知られては

いけない秘密があったからだ。

何故って、歩は男の娘（こ）だったのである。

けれど、歩は自分では女の子だと思っている。女の子を欲していた両親によって、歩は生まれた時から女の子として育てられてきたのだった。スカートを穿き、女の子言葉で話し、女の子と遊んで育った。そして、両親の教育と躾の賜物だったのかは判らないが、歩は誰が見ても女の子にしか見えなかった。

そんな歩も思春期を迎える頃になると、流石に他の女の子たちと自分が「ホンの少しだけ」違っている事に気がついた。両親にそれとなく訊いてみた事があったが明るく笑い飛ばされてしまった。

それからは、歩は「それ（ホンの少しだけ違っている事）」を慎重に他の女の子たちから悟られぬように隠すようになっていった。

しかし、そんな歩にある日、転機が訪れる。

その日、歩は保健室の掃除当番だった。そして、保健室の入り口に設置されていた手の消毒用の薄いアルコール溶液の入った金盥（かなだらい）をひっくり返してしまったのだった。

歩の悲鳴に気がついた養護教諭の立花苑子先生がタオルを持って駆け寄って、ずぶ濡れになった歩のブルマ（掃除の時は体操服に着替えるのが学園の慣例だった）を脱がせてしまったのだった。

「……………あ……………」

拒む間もなかった。更に立花先生はショーツもぐしょ濡れなのを確認して迷わず摺り降ろしてしまったのだった。



「……………ひいっ……………」

思わず両眼を瞑った歩に立花先生は呆気らかんと言ったのだった。

「あらまつ!? ……可愛いモノがついてるのねっ♪」

その声音に非難めいたニュアンスがなかったので歩は恐る恐る両眼を開いた。
立花先生の包み込むようないつもの笑顔があった。

「あ、あゆむ……その……へ、変じゃ……ない……ですか……?」
躊躇(ためらい)勝ちに訊いてみた。

立花先生はタオルで歩の濡れた股間を拭いながら答えた。

「何も変な事はないわよっ♪……」
「歩ちゃんのような女の子」も居るってコト、先生は知ってるもの……それに……」

立花先生はそこで言葉を切ってタオルで《へニス》を包むようにして拭き始めながら少し揶揄(からか)うように訊いた。

「……こうやって先生が擦っても、おつきつき、しないものね?」

「お、お、お……おつきつき……つて!!」

歩の語尾が疑問系に跳ねあがらなかったのを空かさず見抜いて立花先生が重ねて訊いた。

「おつきつき、したコト、あるんだ?」

「ひい!? ……あ、あう……あ、あい………」

頬を染めてあからさまに狼狽(うろた)える歩を、いつもの包み込むような視線で愉しそうに見遣って立花先生が言った。

「カッコいい男の子のコトを考えたたりすると、おつきつき、しちやうのかな〜?」

「ええーっ!? ……な、なんで先生、それ…し、知って…る… ……あ、あきや〜…」

思わず吐露してしまった口を慌てて両手で押さえた歩に、立花先生がまた笑い掛けた。

「うん、間違いないわね ♪ ……歩ちゃんみたいな女の子のコトを ”性同一性障害”

…って言うのよっ ♪」

「性同一…性…障害…?」

不安げに訊き返す歩の裸の腰を優しく抱き締めて立花先生は言ったのだった。

「そうよ…あゆむちゃんは女の子なのに、神さまが間違えて《これ》をつけちゃっただけなの…だから、何も心配する事はないのよっ ♪」

それ以来、歩は放課後になると保健室に通い、立花先生から “男の子とスル” 為のレクチャーを受け始める。それは、男子を悦ばせるフェラチオの仕方から、疑われずに挿入に至る仕方にまで及び、歩は刮目(かつもく)して学習していったのだった。

しかし、だからといって、慣れぬ実践には失敗もつきものである。ただ、歩に取って幸いだったのは、得恋に至らなかった相手が誰も歩の正体をバラさなかった事。まあ、多分、エッチしようとしたら相手が実は男の娘（こだったという事実は、お相手の男子にとって自慢げに語る内容ではなかったのだろう）。

そして、歩はまた新たな恋にチャレンジするのだった。

（……今度は、今度こそ、失敗しないわっ！）

歩は自分で自分に頷いた。

そして、歩は玄関のチャイムに手指を伸ばしたのだった。

歩の当初の行動計画はこうであった。

まず、玄関のチャイムを鳴らす。しかし、両親が不在（単身赴任だった父親の処に母親が世話を焼きに出掛けて早ひと月あまり、未だ帰って来ないのだと聞いていた）ではチャイムに答える者はいない。そこで仕方なく（？）、昨日ちやつかり仕入れた隠し場所から玄関の鍵を取りだして家に入る。

先輩の部屋が二階なのも確認済みである。一応、ノックをしてみる。勿論、返事は無い。部屋に入る。目覚まし時計を確認して、当然タイマーを止める。歩が優しく起

こしている最中に無粋な音を響かされては堪らないというものだ。

それから、カーテンを引いて窓を開け、清々しい朝の空気を部屋いっぱいに取り込んでから、先輩の枕元に腰を落とす。そして、先輩の寝顔にお目覚めのキスをして起こしてあげる……完璧なシナリオであった。

……………筈なのだが。

目覚まし時計のタイマーを止める処までは順調だった。しかし、ベッドで眠る先輩の姿を見た瞬間に、その後の爽やかで清々しいシナリオが一瞬で霧散してしまったのだ。

今はまだ初夏の入り口である。掛け布団といわずとも、毛布なり、あるいはタオルケットくらいは掛けている筈であった。そして、中々起きないようならその毛布なりを『起きないならこれ剥いじゃいますよ♪』などというらぶらぶな追加シナリオすら思い描いていたのだった。

しかし……………。

先輩は、タオルケットはおろかパジャマすら着ていなかったのだ。パンツ一丁で寝ていたのである。

しかも、そのボクサーパンツの股間は、見事なまでの「朝の兆候」を、歩に見せ

つけていたのだった。

「……らからあ……（ちゆる、ちゅぷつ、ちぶうつ）……へんぱいが……（ぢゆるつ、んぐつ、じゅぷう）……ひけはひんらほ「いけないんだよ」……」

歩は横唾えにした《幹》をキツメに吸いあげて不満を洩らした。

「……う……う、うくん……」

それが功を奏したのか、先輩が微かに身じろいだ。

「……あ………起きた……かな？……れろん、えろつ、れるるるるう♪」

歩が《裏筋》をざらついた舌尖で擦りあげてやると、先輩が途惑うように身を振って薄目を開けた。

「やーつと、起きたあ！……（ぶん、ぶんつ）……先輩、おはよう♪……ふふつ、ねぼすけさんっ♥」

「……な、なに？……え？……あ、あゆむ……ちゃん……？」

まだ意識が半覚醒のままの、とろつ、とした顔で上半身を起こした先輩が下腹部の違和感（いや、快感？）に眼を見張る。

「な、な、なにーっ!？」

「…(れる、れりゆ) …ふええ? …ふあにふいへるはつて? 「ええ? …なにしているかって?」 ……(ふあつ) ……おふえらよお…見て、判んない?」

吐き戻した《逸物》を手指で、しゆる、しゆる、と扱きながら先輩を見あげると、《逸物》が、ぴく、ぴくつ、と震えた。

「だ、だから…な、なんで…」

先輩の腰が微妙に退ける。

「…だつてえ…起こしに来てあげたのに…あつ、彼氏彼女になったんだから、お約束」でしょ? ……でもお、先輩ったら、ちつとも起きないんだモン…」

喋りながらも手指の上下動はいたつてリズムカルだ。

「最初はやさしく揺すつて起こしたのよお…それからあ…」

(こつそり、ちゆう、しちやつた♪…てへっ♥)

心の中で、ぺろつ、と舌をだしてから歩は恥ずかしそうに視線を逸らして続けた。

「…でも、でもね…ちつとも起きないしい……そ、それにね…お、おばんつが

…も、もっさり…し、して…るんだモン…きやつ♥

「いや、だから…これは、その…」

歩の手から逃れようと腰を退いて何やら呟く先輩の言葉に、被せるように歩が言い

募る。

「……や、やっぱさ……か、彼女だったら……お、おふえらくらい……し、してあげるべきでしょ？」

「だ、だから……これは、その、朝勃ち……」

「え？……朝勃ち？……もおお、知ってるわよう、そんなコトっ！」

朗らかに答える歩の手を振り払い、逃れるようにして先輩がベッドから降りた。

「……え？……せ、先輩……どこ行くの？……こ、こんな、えっちなコトしたから……き、嫌いになっちゃったの？」

慌てて泣きそうな顔をした歩に先輩が困ったように何やら呟いた。

「……違う？……トイレ？……ああ、おしっこすれば治まるって言うんでしょ？」

「な、な、なんで……あ、あゆむちゃんがあるんな事っ！」

「………なんで知ってるのかって？……ん？」

慌てふためく先輩を不思議そうに見遣った歩が、途端に頬を染めた。

(や、やばっ！)

「……え、ええと……じよ、女子の間でそういう……え、えっちな話って……す、するのよ……と、時々……」

(た、たぶん……)

そして、股間を両手で隠して恥ずかしそうに立ち竦む先輩に、歩は、爽やかに、屈託なく、言ったのだった。

「あつ、そうだつ！……先輩のだったら、呑んであげるわよ……おしっこ♪」

「……………っ！」

「ちよ、ちよつとーお……なんで、そこで固まるのよーっ！………っつか、おちんちんは、びきん、びきん、になつてるんですけどお？」

含み笑いながら揶揄(からか)うように言われて、先輩が歩を睨みつけた。しかし、素っ裸の股間を手で隠した姿で睨んでも些か迫力に欠けていた。

「もしかしてえ……先輩って、そういうリビドーが………っつか、痛い！……頭、こつん、するコトないじゃない！………勿論、ジョーダンですつてばあ！」

(半分くらいは、本気だけどお♪)

「それよりの、せ・ん・ぱ・い？……別のモノ……呑んであげた方が、良くなあひ？」その言葉に先輩が、びくん、と背筋を慄かせ、見る間に頬が真っ赤に染まった。

(やだあ、真っ赤になっちゃって、可愛い♡)

「………そうでしょ♪……ね？……ね？………ほら、もう一度、ベッドに坐って、ね？」

腕を取って誘うようにベッドに腰掛けさせると、何やら先輩は緊張気味に両膝を閉じてしまっていた。

「もお！……えいっ♪」

少し怒ったような顔をして見せて歩は、がぼつ、と先輩の両膝を押し広げると、いそいそ、とその間に腰を落とした。その拍子に制服の短いスカートが捲(めく)れて、慌てて押さえる。

(やっぱ、ニセンチは詰め過ぎたかなあ……って?)

視線を感じて見あげれば慌ててそっぽを向いた先輩が何とも白々しい。

「えっちっ！」

「……………ごめん……………」

しかし、先輩の素直な詫びの言葉に歩の方が、てれ、てれ、になっちゃった。

思わず、照れ隠しのように《逸物》を握ると、歩は、つい、口にだしていた。

「歩ね、おふえら、得意なん………あつ、あああ、ち、ちがくて……せ、先輩……き、気持ち好くなってくれるように……が、頑張るから……」

慌てて言い直した歩は、恐る恐る、しかし媚を含んで先輩を上目遣いで見あげた。

「……………こ、こんな、えっちな女の子、嫌い？」

しかし、握られた手指の締めつけが具合が良かったのか、先輩は、にへらへらと顔を綻ばして首を横に振っていた。

「……良かった♪……告られた次の朝にフラれたら…歩、泣いちやうう……」

ほっ、としたのかわざとらしく泣き真似などして見せてから、歩は桜色の小さな唇を《逸物》に寄せたのだった。

「それじゃ、するね♪……まずはあ、お涎（よだ）を垂らして……えろろ…えろろろ…」

上向けた《鈴口》に、たらたらと、涎をたらすと、それだけで気持ちが良かったのか先輩が、ぞくつ、と身を振った。

くすつ、と微かな笑みを洩らして歩は大きく口を開けると、振り返る《逸物》を真上から呑み込んでいったのだった。

「あむうううんん…お、おっひい♪…んぐつ…（じゆる、ちゅぶつ…ちゆるる、ちゅぶぶ、ちゅぼつ）…んぶつ…（ちゆる、くちゅちゅ…ちゅぼつ、じゅぶぶつ、ちゅぶぶぶうつ）…ふぐつ!? えほつ…けほつ!?…（ふはあつ）」

しかし、二往復目の往路の終点で喉奥を《鈴口》に突かれ、歩は嘔（えず）いて吐きだしてしまった。

「けほっ!? こほっ!? ……せ、先輩の……えほっ!! ……さ、さつきより、おつき
くなってるんですけどお？」

冗談めかして怒った風に見あげると、先輩が困ったような照れ臭いような何ともい
えない顔で見降ろしていた。

「……………うふっ……………そんなに気持ち良かったんですか？」

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。